

学校関係者評価委員会 議事録

国際理容美容専門学校
学校関係者評価委員会
委員長 小林 美貴

会議名	学校関係者評価委員会 定例会議
開催日時	令和6年2月2日 18:00~19:30(1時間半)
場所	新館8階 ホール
出席者	【委員】 小林 美貴(教育機関)、阿部 浩(教育機関)(オンライン参加)、文道 優妃(教育機関)(オンライン参加)、竹島 由紀恵(教育機関)(オンライン参加)、富岡 啓夫(業界)、遠藤 友子(業界)、白井 幸男(業界)、篠崎 紗織(卒業生・業界) 【教職員】 五十嵐 久乃、工藤 佑輝、古荘 浩司、福島 三奈子、池田 昌央、嶺 雄太、境田 三友紀、齊藤 彩子、高橋 淳実(事務局)
学校が重点事項として取り組んだ以下4点に対する委員の助言・提言及び次年度に向けた改善事項の指摘 ① 実務実習について ② 教職員の資質向上と中途退学者の対策 ③ 学科試験変更点と対策 ④ 地域貢献活動と海外研修旅行の実施	

課題点① 実務実習について	説明者：斎藤 前回、高いモチベーション維持を継続させることが課題と説明。 実務実習は年間60時間実施している(2年間で120時間) 掃除等がメインだったが、この期間は美容行為ができるため、シャンプー等の美容行為ができるように実習先へ依頼し実施をした。 お客様を担当できる技術レベルかどうかはサロンのチェックをしっかりと実施し見極めてもらい、そのうえで成績評価もしてもらっている。 学校教育とサロンのグラデーション化を図り即戦力につながる教育を実現していきたい。2年次のシャンプー授業は内定先のシャンプー方法を事前に取り入れ、サロンに入って早期に技術が入れる仕組みを作っている。 また実務実習に関して、厚生労働省からのヒアリングが本校に先行して来た。現場実習ができる時間を増やしてほしいと要望を伝えている。 【白井委員】 以前では考えられないが、取り組みが深海していると感じている。実際に実務実習先で子供もシャンプーをおこない、先輩方に褒められたと喜んでいて、自己肯定感や継続する意欲につながる取り組みだと感じ、昔次のステップにも早く進めるだろう。
------------------	---

	<p>【小林委員】 専門学生から現場に入るのはいいことだと感じる。ただ技術力の差などがあるので、個々に応じた教育を学校としてもしっかりとしていくべき。</p> <p>【斎藤】 入客前でサロンでの技術チェックは行ってもらおう。技術に入る責任感、緊張感がいい効果につながると感じている。</p> <p>【富岡委員】 シャンプーが一番先に入客できるようにするという考えは古いのではないか。ひとりの技術者にすべてお任せしたいと思う顧客が増えている現状から、新人＝シャンプーという概念は取り払うべき。</p> <p>【白井委員】 シャンプーの出来で顧客を失う可能性は否定できない。お客様への入客は注意しておこなわなければいけない。</p>
<p>課題点② 教職員の資質向上と中途退学者の対策</p>	<p>説明者：嶺・境田 中途退学者原因が今年度の途中経過では、経済的理由を上回って意欲低下(基礎的生活ができない)、進路変更が増加傾向にある。また退学者の8割が自己推薦入試での入学であり、進路研究の不足が可能性として挙がっている。 初期対応を早め、学生のSOSを察知できるように職員研修でクラスマネジメント研修を行っている。例) 事例を元にした対応方法のトレーニング 上記の研修により、年間の面談スケジュールや内容の見直しをおこない、一定の成果が得られている。</p> <p>【阿部委員】 対応力に関して経験年数は関係なく、本人の嗅覚次第だと感じている。案件に対して逃げずに対応する姿勢も大切だと感じる。初動の動きの速さが大切。知識を持ち合わせている＋行動として対応できるかどうかも鍵となる。</p> <p>【竹島先生】 担任がすべてではない、話しやすい人を本人が選ぶことも大切。必ずしも担任が解決できるわけではなく、ゴールは本人の悩みが解消されること。若い先生に限って言えば、『その研修を受けたから自身で対応できなければいけない』とプレッシャーとならなければよい取り組みなのではないか。</p> <p>【高橋】 授業時間内でじっとできない学生が多い。コロナの弊害なのか気質なのか、対応策を考えなければいけないと感じている。</p> <p>【小林委員】 何が原因か分からないが高校現場も増えていて、他動的な子が多い印象。またそのような大人も増えていると感じている。 学校に通えなかった時期が多いのも原因があるが、大人が気を遣いすぎではないか。国際は丁寧な対応でいいが、もっと突き放す方法をとってもいいのでは？ただし解決できなければ受け止めてあげるスタンスはなければならない。</p>

	<p>【文道先生】 小林先生と同感。映像系のコンテンツを早送りで見ている若者が増えていて、結末、答えを知りたがる傾向が顕著に表れている。 自分で経験を積んで失敗をさせることも大切ではないか。そこから学ぶこともあるが、居心地が良すぎる環境を好む子が非常に多いのではないか。</p> <p>【工藤】 学校の中で失敗できる環境が少ない。そのためひとつ目の課題でも話した、現場に触れさせる機会をどのように提供するかが重要としてとらえている。 別な課題としてあるのは、熱意のある教職員が反作用としてベクトルが自身に向いてしまうという現象が今年度あった。これに関しては次回時間をかけて議論したい。</p> <p>【篠崎委員】 今の子は承認欲求が強い傾向がある。言動ではなく行動に目を向けて根柢の悩みを改善しないといけない。話を聞く時間をしっかりとることで解決できることもあるように感じている。</p>
<p>課題点③ 学科試験変更点と対策</p>	<p>説明者：嶺 学科試験を前期後期に3日間程度でまとめて実施していたが、学習の定着を図るため学科授業終了後1週間以内に学科試験を実施するように変更した。 国家試験取得では実技はもちろん学科対策も重要。しくみの変更で解決できることもあるのではないかと考え変更をした。</p> <p>【小林委員】 やり方はいろいろあるが、結局丁寧にやるしかない。</p> <p>【遠藤委員】 様々な対策を取っていていいと感じる。</p> <p>【竹島委員】 商業高校なので実技期間と筆記試験期間で分かれて実施をしている。生徒からすると時期がずれているので集中できる状況にある。一概にどちらがいいとは言い難い。</p>
<p>課題点④ 地域貢献活動と海外研修旅行の実施</p>	<p>説明者：工藤・高橋 《CSR活動》 コロナ明け荒川区のお祭りに複数参加ができた。 《海外研修》 人数が思ったより多く集まったが、円安のため価格が高騰している状況。 現地ではコロナ前よりも縮小傾向にあるところも、実際に行ってみないと分からないこともあると感じた。</p> <p>【文道委員】 国際コースの2年生は修学旅行でアメリカへ行くことができた。</p>